巻頭言

ブランディングの世界展開

研究代表者　大矢 裕一

化学生命工学部 化学・物質工学科 教授
医工薬連携研究センター長

この研究ブランディング事業には、タイプ A と B の二種類があり、我々はタイプ B「世界展開型」としての採択を受けている（タイプ A「社会展開型」は大都市圏の収容定員 8,000 人以上の大学は応募できない）。

「国際化」が国と国との間の活動を指す（国境が存在する）のに対し、「グローバル化」は、ある活動が（国境があたかも消失したかのように）国の枠を超えて行われることを指す。サイエンスは本来、国境の無い「グローバル」なものである。研究論文（英語）を掲載している学術雑誌は、発行元や著者がどこの国に属しているかよりも、その学術的価値が重要であり、国際学会は、どこで開催され、どの国の人が参加しているかよりも、発表される研究内容の方が重要である。そういう意味では、これらはグローバルな活動と言える。しかし、研究のレベルの高さは国力の一つの反映であるし、科学界における国のプレステージを維持するには、権威ある学術雑誌を擁しているかどうか、開催される国際シンポジウムに海外からどれだけ人を集められるかは重要である。何でもかんでも「グローバル化」に流れるのではなく、各国の特徴や多様性を維持した上での「インターナショナル」な活動の重要性も忘れてはならない。

さて、この事業の「世界展開」は、英語で論文を発表し、国際学会で研究発表をしてさえいれば、順調に進んでいくのであろうか？答えは否であろう。KUMP とは、本学開発の医療用高分子材料の総称であって特定の化合物名ではなく、「KUMP」という名称は個々の論文や学会での研究発表にはほとんど登場しない。せいぜい、謝辞の欄に記載があるか、プレゼン画面の隅にロゴマークが入っている程度である。ブランド名「KUMP」とプロジェクトの全体像を周知させるためには、違った形での情報発信が必要である。自画自賛ながら、2018 年度はこの「世界展開」を大きく進めることができた年になったと自負している。

2019 年 1 月には当初の予定通り、KUMP を冠した国際シンポジウム (KUMP International Symposium) を開催した。シンポでは基調講演として、我が国の医工連携の先駆けとして、東京女子医科大学・早稲田大学の連携による先端生命医科学研究所 (TWIns) の創設を主導された東京女子医科大学・岡野光夫特任教授、2024 年世界バイオマテリアル学会 (WBC) の議長を務める韓国 Ajou 大学校・K. D. Park 教授に登壇いただいた。この他、提携大学である米国 Clemson 大学、タイ Chulalongkorn 大学を含む国内外からの招待講演者 10 名を交え、プロジェクトメンバーが研究の進捗報告を行った。リップサービスもあるかと思うが、参加者、特に海外招待講演者からの反響は上々であり、最大級の賛辞を頂戴した。我々のプロジェクトの意義と存在価値を理解していただけたのではないかと思う。既存の国際学会で単に研究発表をしているだけでは、こうした周知活動はできない。参加した学生も、世界の著名な研究者が一堂に会した様子を間近で見て、自身の参加しているプロジェクトが世界に繋がっていることが実感でき、大きな財産になったことと思う。

8 月には英国科学雑誌 Research Features (Issue 129 , 2018)[1] 誌上に、10 月には世界最高峰の学術雑誌 Nature（Vol. 562, No. 7728, (2018))[2] の誌上に、プロジェクト概要と研究トピックスを紹介する英文記事を掲載した。これらも普通の研究論文では発信することができない内容を含み、大いに意義があった。2018 年 11 月には、提携大学であるベルギーの Leuven 大学医学部、および Ghent 大学においてワークショップを開催し、メンバー 3 人による講演とプロジェクト紹介を行った。この他、国際メディアへのプレスリリースも随時行っている。今後は、こうした対面による周知活動や、旧来メディア（雑誌、新聞など）による周知活動に加え、SNS や Web などの新メディアを通じた情報発信を、これまで以上に充実させる必要を感じている。

もちろん、我々の「世界展開」の最終目標は、開発した医療器材を実用化し、製品として世界中に行き渡らせる＝「人に届ける」ことである。この実現には 5 年というスパンは短かく、息の長い粘り強い取り組みが必要である。しかし、決して諦めることなく、不断の努力を続けていきたい。

1) https://researchfeatures.com/2018/08/22/ku-smart-tackling-medical-challenges-collaboratively/
2) https://www.nature.com/articles/d42473-018-00187-w